
首なし屋敷

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

首なし屋敷

【Nコード】

N8936P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

入れば必ず首を切られて殺される古い洋館。そこに入ったエクスシスト二人が見たものは。現代もののホラーです。

第一章

首なし屋敷

誰もいない屋敷である。廃墟である。

明治に建てられたというその洋館は壁にはヒビが入り窓はあちこちが割れている。屋根にもそのヒビの入った壁にも緑の蔦がかかっている。庭は荒れ放題であり門も何もかもが壊れ朽ちていた。まず誰も寄らない屋敷であった。

だがこの屋敷に不穏な噂が流れていた。それが何かというのだ。

「出るんだってよ」

「幽霊がかよ」

「それが出るのかよ」

「ああ、出るんだよ」

こうした廃墟にはお決まりの話だった。

「中に入った奴は絶対に殺されるんだってよ」

「おいおい、絶対にかよ」

「それはまた物騒だな」

皆それを聞いてまずはこう言うのだった。

「それで幽霊に殺されるんだよな」

「そうだよな」

「ああ、そうだ」

これはもうわかることだった。幽霊が出てそれで中に入って殺されるとなればだ。幽霊に殺されるといふ展開しか有り得なかった。

「その殺し方もえげつなくてな」

「えげつないのか」

「どんなのなんだよ、それで」

「首を切るんだよ」

それだというのだ。

「その中に入った奴のな。首を切るんだよ」

「首をか」

「それをか」

「それで首を切られた奴がな」

それからもまだあるのだった。

「首は洋館の門に飾られて胴体はその前に置かれるんだよ」

「つまり晒し首か」

「何か横溝な話だな」

「まあそんな感じだよな」

確かにそうした話だった。少なくとも尋常な話ではない。

「それで名付けて首なし屋敷な」

その横溝的なネーミングだった。

「それがあの屋敷の名前なんだよ」

「また嫌な名前だな」

「全くだな」

話を聞く者はその屋敷の名前についても不快感を示した。示さざるを得ないものがそこにはあった。人間の本能からそうなるものだった。

「それでその屋敷に入ったらか」

「幽霊に首を切られる」

「そうなるってことか」

このことはすぐに街中に広まった。それで誰も近寄らなくなった。実際に首を切られた者がいるかどうかはわからない。しかしその噂を聞いて誰も近寄らなくなった。

ところがである。その噂を聞いて街の不良達が興味本位でその屋敷の中に入って見た。すると次の日には実際に起こってしまった。

彼等は全員首を切られて門の前に放り出されていた。首は門の柵のところ突き刺されて並べられ身体はその前に転がさせられていた。噂通りのことになった。

警察はこのことを公にしなかった。只の殺人事件として処理した。マスコミも流石にこのことは報道できなかった。しかしであった。

人の口に戸口は立てられない。噂として急激に広まっていった。ネットにも流れ忽ちのうちに知られるようになった。そうしてだった。

この街の署にだ。一人の神父がやって来た。初老で背の高いすらりとした、引き締まった顔の神父だった。銀髪を丁寧に後ろに撫で付けている。

彼の横には一人の少年がいた。まだ十五程度である。見事な金髪に青い目をした美しい少年で背はかなり高かった。彼もまた黒い法衣を着ている。

その二人が来てだ。署長に対して言うのであった。

「噂は聞きました」

「あの屋敷のですか」

「はい、バチカンから来ました」

こう署長に話すのだった。バチカンと聞いて署長は自室で緊張をみなぎらせた。

「バチカンからといますと」

「屋敷の件の解決に参りました」

「そういうことですか。話には聞いていましたが」

署長もバチカンのことは聞いていた。とはいっても噂であるが。所謂エクソシストである。それを行う者がいるということだ。

「まさか。実際にこの目で見るとは」

「しかし私は今ここにいます」

神父は厳かな声で署長に対して述べた。

第二章

「実際にです」

「そうですね。それは確かに」

「そしてです」

神父の言葉は続く。

「私の名前ですが」

「何と仰るのですか」

「ヘーシングといいます」

これが名前だというのだ。

「そして隣にいるのは助手のヴァシエです」

「宜しく御願います」

そのヴァシエもまた名乗ってきた。少年のテノールの声だった。

「ヴァシエです」

「わかりました。それでヘーシング神父」

「はい」

「あの屋敷の事件を解決して下さいのですね」

「その通りです」

神父は厳かな声で答えてきた。

「私はその為に来ました」

「左様ですか」

「しかもです」

神父はさらに話してきた。

「この事件ですが」

「何かお心当たりでも」

「ないわけではありません」

「この署長に答えるのだった。」

「それもあって参ったのです」

「心当たりがですか」

「そうです。ですから余計にです」

「任せて欲しいのですね」

「そういうことになります」

こう述べるのだった。署長はここで神父がかなり流暢な日本語を話すことに気付いた。日本人のそれと差支えがないまでであった。

「ですから」

「わかりました。それではです」

「お任せ頂けますね」

「事情は後でお話してくれますか」

条件はつけた。しかし寛大な条件であった。

「事件が解決した後で」

「わかりました。それではです」

「全てが終わった後で」

「お話させてもらいます」

こう署長に話した。そうしてであった。

「では早速」

「私も」

そのヴァシエという少年も言ってきた。

「これで」

「お二人だけで充分ですか？」

「充分過ぎる程度です」

神父はこう署長に答えた。

「むしろです」

「むしろ？」

「この話人が多いと厄介なことになります」

「厄介ですか」

「何しろ相手は人ではありません」

神父の語るその目が光った。嘘を言う目ではなかった。

「ですから」

「人ではありませんか」

「それもまたお話をさせてもらいます」

「全てが終わったその後で、ですね」

「はい」

その通りだというのである。

「その時にです」

「それでは」

最後にヴァシエが言ってだ。そのうえで二人でその洋館に向かう。洋館の前の首も屍ももう葬られている。ただそこに不気味な洋館が赤い満月を後ろにして聳え立っていた。それ自体がまるで生き物であるかの様にそこにあつた。

その洋館を見てだ。神父はヴァシエに対して言ってきた。彼は神父の後ろに控えるようにして立っている。二人が今いる場所はその門の前だ。

「ヴァシエよ」

「はい」

「感じるな」

まずはこう告げたのだった。

第三章

「妖気を」

「よく」

実際にそれを感じると答える彼だった。

「感じます」

「そうだ。間違いない」

神父は鋭い顔で述べた。胸にある銀の十字架が闇の中で輝く。

「ここにいるのはだ」

「この世にいてはならないもの」

「バチカンで言われていた通りだな」

「そうですね。それでは」

「行くとしよう」

少年に対して告げた言葉である。

「これからな」

「それでは」

二人は門を開けた。鈍い、きしむ様な金属音が夜の中に響き渡る。その嫌な音を聞いたうえで洋館の中に入る。するとその中は。

完全な廃墟だった。何も無い。暗い部屋には割れた窓から月明かりが差し込んでいる。そのせいで部屋の中は比較的明るい。しかしだった。

家具も何もかもが割れて埃だらけになっている。蜘蛛の巣が張りシヤングリラは今にも落ちそうだ。二人はその中に入ったのである。そこに入るとだ。すぐにヴァシエが神父に言ってきた。

「神父様」

「わかっている」

神父はにこりともせず答えた。

「それはだ」

「では」

「行くとしよう」

こうヴァシエに告げた。

「先にな」

「わかりました」

その埃だらけの階段を昇っていく。二階もまた同じで埃だらけでしかもうら寂れていた。床も踏めば抜け落ちてしまいそうな、そんな有様だった。

だが二階に着いた。そのうえで二人は一步前に出ようとした。その時だった。

「来ているな」

「如何にも」

神父は静かな言葉でその声に応えた。

「来ている」

「バチカンからだな」

姿はしないが声は確かに聞こえていた。

「そうだな」

「だとすればどうする？」

ヴァシエがその声に対して問うた。

「その場合は」

「決まっている。斬る」

姿のない声の返答である。

「その時はだ」

「斬るか」

「そして首を捧げよう」

声はこんなことまで言ってみせてきた。

「我が主の為に」

「主か」

「父と子と精霊の為に」

キリスト教の言葉ではあった。

「その二つの首を捧げよう」

「一つ言っておく」

神父はその声に対して返した。

「主はだ」

「どうだというのだ、主は」

「生贄を求めることはない」

それはだというのだ。

「決してだ」

「決してか」

「そうだ、決してだ」

神父はそのことを強く語ってみせた。

「貴様もそう学んだではないのか」

「違うな」

しかしであった。声はそれを否定した。

「それは違う」

「違うというのか」

「そうだ、違う」

声は神父の意見をあくまで否定する。

第四章

「神、そして主は人を殺せと言われた」

「そして生贄にか」

「間違いなく仰った」

彼だけが意固地であった。

「だからだ。私は愚か者達を生贄に察させるのだ・

「では、か。私達もまた」

「そうだ」

声はまた答えてみせた。

「その通りだ。その首貫おう」 100

「話は聞いた」

神父は恐れる素振りもなく言葉を返した。

「だが。貴様の話は全て否定する」

「否定するならすれがいい」

「首を刈るだけか」

「如何にも。それではだ」

気配がだ。ここで近付いてきた。

そのうえでだ。神父の後ろからだ。風が来た。

「来た!？」

「ヴァシエ」

神父はすぐに彼に告げた。

「いいな」

「はい」

「後ろだ」

こう告げるとだった。ヴァシエは一旦屈んでだ。そのうえで右手を自分の左手の懐に入れた。そしてそこからロザリオを出してきたのだ。

「投げる」

彼はまた告げた。

「後ろだ、いいな」

「わかりました」

ヴァシエはそれに頷いてだ。その手にしたロザリオを後ろの方に投げた。するとであった。

「グッ!？」

「当たったか」

「当てるようにしました」

こう神父に答える。

「ですから」

「見事だ、ヴァシエよ」

神父は後ろを振り向いた。するとだ。

そこには神父と同じく白い法衣を着ていた。だがその表情は違っていた。

赤と黒の神と髭、それに異様に大柄な身体。何処からどう見ても普通の人間ではなかった。

しかもだ。彼は不自然な雰囲気醸し出してだ。こんなことも言ってきた。

「この程で終わりはしない」

「まだか」

神父はその声に対して告げた。

「まだそう言うのか」

「その声は。まさか」

ここだ。声の調子が変わってきた。

そのうえでだ。警戒する色を見せて言ってきたのだった。

「貴様か」

「覚えているようだな」

「忘れる筈がない」

今度はだ。彼の名前を呼んでみせた。

「ヘーシングだな」

「そうだ、やはり覚えていたか」

「忘れる筈がない」

声にだ。今度は明らかかな怒りが宿ってきていた。

「何があるうともだ」

「死んだ今でもだな」

「貴様に殺された」

声に怨みまで籠ってきていた。

「そのこと、忘れる筈がない」

「殺したのではない」

神父はそのことは断ってみせた。

「あれはだ。殺したのではない」

「では何だというのだ」

「裁きだ」

それだというのだ。

「司教にありながら異端に染まり罪を犯した貴様への裁きだ」

「私が異端か」

「異端以外の何者でもない」

神父の言葉には厳しいものがあつた。有無を言わせぬ強いものがあつた。

「罪なき子羊達を生贄に捧げること。異端でなくて何と云う」

「聖餅だ」

これが声の返答だつた。

「それだ」

「聖餅か」

「身体は聖餅だ」

声は身体はそれだと言ってみせる。

「そして血は」

「ワインか」

「聖餅は主の身体、ワインは主の血」

キリスト教でいつも言われることの二つだ。この二つを定義して

そのうえで儀式を行うのである。これがキリスト教なのである。

第五章

「その二つを神に捧げているのだ」

「その為に子羊達の首を切るか」

「それこそが神の御意志」

揺ぎ無い。狂気に満ちているが揺るがないのは確かだった。

「だからこそだ」

「それで殺すか」

「それを妨げるといふのか」

「無論」

声のする方に顔も身体も向けての言葉だった。

「それは神の御教えではないからだ」

「バチカンは何もわかっていないのだ」

声はまた反論した。

「神の御意志がだ」

「わかっていないのは貴様だ、ローヴェレ司教」

神父は相手のその名前を呼んだ。するとだった。

前の暗闇、廊下の向こうからだ。法衣の男が出て来た。

その法衣は漆黒であり胸には十字架がある。しかしだ。

首がなかった。首があるべき場所は切られそこから鮮血が滴っている。そして首は右脇で右手に抱えられていた。痩せた髪の薄い男の首がその脇にあった。左手にあるのは巨大な禍々しい鎌である。

その彼がだ。神父に対して言うのだった。

「あの時も言ったな」

「何度でも言おう」

神父の言葉は変わらない。

「貴様はわかっていないのだ」

「神の御意志がか」

「わかっていない。神は血を好まれぬ」

神父はこう話して彼の考えを否定した。

「好まれるのはだ」

「何だというのだ」

「心だ」

それだというのである。

「確かな信仰の心だ。それだ」

「違うな。命だ」

司教の言葉はここでも否定だった。

「聖餅とワイン。その二つにある命だ」

「あの時もそうして多くの命を奪ったな」

「全ては神の御為」

司教の考えも言葉も変わらない。

「だからこそだ」

「それによりバチカンを追われ日本に逃れたな」

「そして貴様に倒された」

右脇にある首が憎々しげな目で神父を見据えていた。濁った灰色

の、明らかに生者のものではないその目で、である。

「首を切られてな」

「あの時で終わったと思ったがな」

「しかし私は蘇った」

声にさらなる憤怒が宿ってきた。

「再び。神にお仕えする為にだ」

「貴様が仕えているのは神ではない」

神父もまた彼のその言葉を否定した。

「貴様が仕えているのは悪霊だ。いや」

「いや？」

「貴様自身が悪霊だ」

そうだというのである。

「最早そうなっているのだ」

「戯言を」

司教はその言葉を否定しようとした。

「私を。この私をそう言うか」

「なら何故その姿でこの世にいる」

神父が今度問うのはこのことだった。

「それは何故だ」

「この姿でか」

「私に切られたその姿のままだ」

今神父の手には刃があった。鋭い銀の剣である。

「この剣で切られたその姿のままだ」

「それは」

「答えられまい。貴様は最早悪霊になっている」

司教をだ。そう定義付けてみせた。

「それ以外の何者でもない」

「今も私を侮辱するのか」

「侮辱ではない。事実を言っているだけだ」

神父は引かない。一歩もだ。

第六章

「それだけだ」

「事実をか」

「もう一つ事実を言おう」

神父は一步前に出た。

そのうえでだ。隣にいる少年に対して告げた。

「ヴァシエ」

「はい」

「左に行け」

そうしろというのである。

「私は右に行く」

「右にですか」

「そうだ、右だ」

彼はそこだというのだ。

「左右から攻めるとしよう」

「わかりました、それでは」

少年は彼のその言葉に素直に頷いてみせた。

そのうえでだ。二人はそれぞれ左右に動いた。そのうえで司教のそれぞれ斜め前に位置してそのうえで構えるのだった。

「行くぞ」

「覚悟して下さい」

「ふん」

司教は構えたその二人にだ。どす黒い笑みを浮かべて返すのだった。

「私はあの時とは違う」

「違うな。確かにな」

「貴様のことはわかった」

これは司教の言葉だ。

「あの時でな」
「わかったというのか」
「首を斬られたあの怨みと共にだ」
「声に怨恨がはつきりと出ていた。」
「それははつきりとだ」
「だから違うというのだな」
「そうだ。今度は貴様を斬る」
鎌が光った。禍々しい輝きを闇の中に見せる。
「その首をだ」
「ならそうしてみるがいい」
神父はその司教を前にして悠然と告げてみせた。
「私を倒せるというのならだ」
「行くぞ」
司教は音もなく動いた。まずは一步前に出た。
そうしてだ。その鎌を動かしてきたのだ。
「神父様」
「わかつている」
ヴァシエに対して落ち着いた声で告げた。
「来るな」
「はい、どうされますか」
「どうするもこうするもない」
「といいますと」
「倒すだけだ」
それだけだと。やはり落ち着いた声だった。
「この悪霊をだ」
「左様ですか。それでは」
「いつも通りだ」
「今度の言葉は素っ気無いものだった。」
「いつも通りに行くぞ」
「そうですか。いつも通りに」

「わかった」

またヴァシエに対して告げてみせた。

「これで」

「よく。それでは」

こうしてだった。まずヴァシエが動いた。彼は自分の場所から司教に対して攻撃を仕掛けた。その首を持っている右脇にだ。

「来ただと」

「僕もいるんだ」

こう言っただ。その右手から剣を出してきた。

それで司教の首を貫こうとする。しかしだった。

「ません」

司教はすぐにその左手に持っている鎌を動かした。それで迫るヴァシエのその剣を払ってみせたのである。その動きは速かった。

「その程度の攻撃で私は倒せん」

「確かにね」

ヴァシエもそれは認めた。横からの一撃が彼を襲ったがそれは上に跳んでかわした。

第七章

「僕では貴方を倒せない」

「そうだ。わかつているなら消えろ」

「だけれど僕だけじゃないよ」

ヴァシエはここでこう告げた。

「わかつているね」

「?そうか」

「そうだよ」

あらためて司教に告げた彼だった。

「ほら、神父様がおられるよ」

「くっ、それが狙いか」

「如何にも」

既にだ。神父は司教の間合いに入っていた。そうしてだ。

その銀の剣を司教の胸に突きたてた。剣の形は十字だった。

十字の剣は司教の胸を貫いた。一瞬であった。

一瞬で勝負はついた。それで終わりだった。

「うっ……」

「例え貴様が悪霊になっていたとしても」

血は流れない。だが苦悶の声を漏らす彼にはっきりと告げた。

「これでは滅するな」

「何ということだ、私が」

「確かに私はあの時から変わっていないかも知れない」

神父自身もそれは認めた。

「だが」

「だが、か」

「今の私にはヴァシエがいる」

その彼に顔を向けての言葉である。

「だからだ。貴様に負けることは最初からないとわかっていた」

「その子供がいるからか」

「貴様は一人のままだ。だが私は二人になった」
司教にこうも告げた。

「そういうことだ」

「それでか。私にまた勝ったというのか」

「この世から消えるのだ」

また司教に告げた。

「いいな。それではだ」

「消える、この私が」

「人を殺め神の道から離れた異端の者」

司教に他ならなかった。胸を剣で貫かれ消えようとしている彼だ。

「これで消えるがいい」

「おのれ、神はまだ私を」

「神は望んではおられぬ」

今の言葉はこれであった。

「貴様の行いの様なものはだ」

「私は、まだ……」

これが最後の言葉だった。司教は消えた。後に残ったのは静寂のみだった。その他には何一つとして残ってはいなかった。

第八章

こうして事件は終わった。神父は約束通りヴァシエを連れて署長に一部始終を話した。署長はその話を全て聞いてから言つのであった。

「成程」

「はい、これが話の全てです」

神父は謹厳な声で署長に対して話した。

「おわかりになりましたか」

「聞きましたかわからないところの多いお話ですね」

署長はこう実直に答えた。

「どうにも」

「そう仰るのですか」

「悪霊ですか」

「まず言うのはこのことだった。」

「悪霊がああ洋館にいてですか」

「私が以前ああ洋館で倒したああ司教のです」

「魂は生き残っていたのですね」

「そして尚も異端として蠢いていたのです」

「それでなのですか」

「はい、そういうことでした」

「こう署長にあらためて話す。」

「世の中こうしたこともあるのです」

「話は聞いていました」

署長はこうも述べた。

「ですが。まさかここであつたとは」

「思いも寄りませんでしたか」

「全く。そうしたこともあるのですね」

「はい。ですがこれで、です」

「事件は解決しましたね」
「あの司教は地獄に堕ちました」
「確かな声での返答だった。」
「間違いなく。これで」
「わかりました」
「人は誤った考えを持ったまま死ぬとです」
「悪霊になる」
「署長が現実のものとして知ったことだ。」
「そういうことですか」
「そしてそれにより人や世に害を与え続けることもあるのです」
「今のようですね」
「はい、おわかりになりましたか」
「よく」
「こう頷いて答えた。」
「本当にです」
「人の世は科学やそういったものだけで動いてはいません」
「その他のものでもですか」
「科学にしてもです」
「神父はその科学について言及した。」
「神の御力の一つです」
「神の、ですか」
「そして我々は神の御力を使わせてもらっただけなのです」
「そしてあの司教をなのですね」
「はい」
「署長に対して静かに答えた。」
「そういうことです」
「成程、そうですね」
「そういうことです。それではです」
「バチカンに帰られるのですね」
「また。次に行くところがありますので」

神父は穏やかな笑顔に戻って述べた。

「ですから」

「左様ですか。それでは」

「機会があればまた御会いしましょう」

「はい、そちらの方も」

署長はヴァシエに対しても声をかけた。

「また。縁がありましたら」

「はい、宜しく御願います」

ヴァシエもまた穏やかに笑ってから署長に言葉を返した。

「その時には」

「そういうことで」

こうして署長は神父達と別れた。事件は只の事故として処理された。しかし署長はこの事件のことを何時までも覚えていたのだ。彼にとって到底忘れられない事件であったからだ。悪霊が起こした事件として。

首なし屋敷

完

2010・8・3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8936p/>

首なし屋敷

2011年1月2日21時10分発行